Mitsuo Nakamura,

The Crescent Arises over the Banyan Tree: A Study of the Muhammadiyah Movement in a Central Javanese Town, c.1910s-2010, 2nd Enlarged Edition.

Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, 2012, xlv+428pp.

見市　建（みいち　けん）

Ⅰ　本書の概要

本書はインドネシアのイスラーム研究に先駆的な業績を残した著者による長年の臨地研究の集大成ともいうべき著作である。現在ではインドネシアの政治や社会の分析においてイスラームの要素は不可欠であるとみなされているが，「固有性」を明らかにすることを目的とする地域研究においてイスラームは長らく等閑視されてきた。すなわちイスラームはジャワ，あるいはインドネシアや東南アジアの基層文化を覆う表層に過ぎないとみなされた。またかつては，近代化に伴って世俗化が進行するとの考えが支配的であった。著者はそうした時代に本書の元となる臨地調査を行い，インドネシアにおけるイスラーム研究に先鞭をつけた。

本書はジャワ島中部の古都コタグデにおける約100年間を，ムハマディヤの発展を中心に，詳細な資料と現地調査を踏まえて描き出している。ムハマディヤは20世紀初頭にジョグジャカルタの王宮に興り，インドネシアの近代主義あるいは改革主義イスラームを代表する組織として発展した。伝統主義イスラームを代表するナフダトゥル・ウラマーとともに二大組織と呼ばれ，現在まで社会的政治的な影響力を誇っている。ムハマディヤの指導者たちは，イスラームは本来合理的で理性的な宗教であるとして，イスラームから逸脱し，混淆的かつ前近代的な迷信や習慣を排してコーランとスンナに回帰することを主張し，他方で近代的な技術や制度を重視して学校や病院を多数建設した。

本書のタイトルにある「菩提樹」とは，菩提樹に神秘的な力が宿るといった信仰に代表されるジャワ固有の信仰形態を意味し，「三日月」は本書の主たる研究対象であるムハマディヤに代表されるイスラーム運動を示している。「菩提樹」と「三日月」はまた，クリフォード・ギアツによる有名なジャワのムスリムの二分法であるアバンガン（およびプリアイ）とサントリに対応し，同区分を自明で静態的に捉える見方に異議を唱えている。「三日月」が「菩提樹」の上に昇る，というタイトルどおり，本書はイスラーム運動の文化，社会，政治，あるいは経済も含めた広範な影響力を強調する。舞台であるコタグデにおいて，「三日月」はより多様なスタイルや組織的形態を伴いながら輝きを増し，他方の「菩提樹」には陰りが見られるものの，古いジャワの文化的表現は混淆的な信仰形態と切り離されながら芸術として花開いているという。本書はコタグデやジャワ島中部地方のみならず，インドネシアの社会・政治史あるいは全国組織としてのムハマディヤの性格を捉えるうえで極めて重要なケーススタディである。

Ⅱ　本書の構成と内容

第Ⅰ部「コタグデにおけるムハマディヤの発展――1910年代－1972年――」は，1976年に博士論文としてコーネル大学に提出され，83年にジョグジャカルタのガジャマダ大学から出版された（ゆえにあまり流通しなかった）本書のオリジナル版を誤植などのわずかな修正を経て再録したものである。主として1970年10月から約一年半の臨地研究に基づき，ムハマディヤの結成時から1972年までのコタグデにおける，ムハマディヤの改革運動の発展を辿った。コタグデは16世紀末にマタラム王国の最初の首都として建設された町であり，イスラーム布教以前の要素を強く残すクジャウェンと呼ばれるジャワ神秘主義が浸透している。またムハマディヤ発祥の地であるジョグジャカルタに隣接している

（現在の行政区分ではジョグジャカルタ市内に位置する）。したがってこの地における改革運動の進展は，ジャワの宗教的変遷を理解するためにとくに重要であるという。

著者はムハマディヤの改革主義が，コタグデにおけるジャワ人の社会において広範かつ重大な変化を与えたと主張した。第1章では，ムハマディヤとコタグデの歴史と現状を踏まえてギアツのアバンガン（およびプリアイ）／サントリという二ないし三分法を批判的に検討している。ギアツは宗教的傾向と職業的なエートスを関連させ，農民でジャワの世界観の影響下にある名目的なムスリムをアバンガン，同じく貴族をプリアイ，商人にみられる敬虔なムスリムをサントリと呼んだ。しかし，ムハマディヤはジョグジャカルタの王宮（つまりプリアイの政治的文化的中心）における宗教改革運動を起源とし，またコタグデにおいてムハマディヤに参加した同地名産の銀細工の職人や商人の大半は元々アバンガンであった。第2，3章では，既存研究や植民地資料，そして著者の臨地研究の成果を踏まえて，コタグデの宗教的社会的な舞台装置――王宮文化を中心とした「菩提樹」の下の伝統的な社会のあり方とムハマディヤの台頭――を明らかにしている。第I部のハイライトは第4章以降である。まずコタグデにおけるムハマディヤの主要人物のライフヒストリーから，その組織的発展と活動の実態を明らかにした。初期のムハマディヤ指導者たちは裕福な商人であるとともに，既存の理解に反して，伝統主義の寄宿学校（プサントレン）やメッカに留学して宗教教育を受けていた。またムハマディヤ学校は，とりわけコタグデにおいて，宗教教育のみならず，もっとも重要な近代教育機関として機能していた。第5章では第2次世界大戦と独立戦争後のコタグデの社会変化とムハマディヤの発展を描き，以上の記述を踏まえて第6章では「ムハマディヤのイデオロギー」を明らかにしている。たとえば，「欲求」や「情熱」を意味するアラビア語起源のnafsu，その類義語nafas（「息」，「呼吸」）の統制はジャワ文化において重要な価値観だとされる。ムハマディヤにおいては，非道徳な欲求（hawa nafsu）の統制が「本当のムスリム」の要件とされ，これに対してクトプラック（kethoprak）と呼ばれる大衆演劇は，非道徳な欲求を喚起させるとして批判の対象になってきた。クトプラックを政治的動員の一環として推進していたインドネシア共産党（PKI）の活動は，したがって神の意思に反した無秩序や専制，邪悪な行為を招く，とみなされた。

著者は，緩やかで，無頓着，パトロン頼みのアバンガンと，自己修養と長期的計画に規律付けられたサントリの生活スタイルを対比的に扱いながらも，それらは排他的な関係ではなく，個人のなかでも両立し変化していくものだと捉えている。そしてムハマディヤの宣教活動によって，次第に後者が優勢になったと結論づけている。著者の何より重要な主張は，ムハマディヤのイスラーム改革主義は，イスラームという普遍的な体系によって外からジャワの文化を変えようとしたのではなく，むしろジャワの文化的伝統はその中枢にあり，そこから純粋なイスラームの要素を抽出する道徳運動である，ということであろう。ギアツらによってジャワの（すなわちアバンガンないしプリアイの）文化の中心とみなされてきた概念が，ムハマディヤの宣教活動においてどのように取り入れられてきたのか，聞き取りや金曜礼拝の説教，文献の分析から明らかにしている。

第Ⅱ部「コタグデ再訪，1972－2010年」は，第I部執筆後のコタグデへの継続的な訪問および近年の数カ月の滞在を踏まえて書かれている。コタグデの風景は大きく変化し，1970年に1.7万人弱だった人口は2007年には3.5万人と倍以上になった。第8章ではまず舞台設定の変化，すなわち過去40年近くのコタグデにおける社会変化を，都市化，多様化，グローバル化に分けて整理している。ムハマディヤは1965年の9月30日事件を経て弾圧された共産党員の社会復帰プログラムなどを通して政府に協力しつつ，組織と活動を拡大した。第9章では，宗教活動（ダアワ），教育，医療の各分野でムハマディヤが挙げてきた成果を紹介，また制度的発展の基盤としてのワクフ（財産寄進制度）の役割に注目している。他方，公立の学校と病院および新興のイスラーム政治運動である福祉正義党の党員が経営する私立学校の台頭などによって，ムハマディヤの活動はコタグデにおいてもはや支配的な立場ではなくなったことが示される。第10，11章では時代の変化に伴ってムハマディヤ内外に生起した課題とその対応について議論されている。スハルト体制下で順調に発展していたムハマディヤであったが，政権へ

の政治的な服従に対する若い世代の不満や指導部への批判が高まっていた。コタグデでは2000年代に入ってからようやく世代交代が起こり，組織の創設者とその家族たちに代わって，家庭的な背景にかかわらず大卒者の第3世代が主導権を握るようになった。貧困や道徳的な荒廃など社会問題への関心が喚起され，貧困対策としてマイクロファイナンスやソーシャルビジネスも行われるようになった。さらに，これまで多神教的，前イスラーム的習慣とみなして敵対的な態度を取ってきたジャワの民俗芸能を積極的に再評価する「文化的ムハマディヤ」を自称する会員たちも現れた。最後の2章は1999年以降開催されるようになった「コタグデ祭り」と，2006年のジャワ島中部地震の復興におけるムハマディヤの役割について論じている。コタグデ祭りにおいては，数々のジャワの民俗芸能が披露され，またパレードで労働者の権利を訴える一群も登場し，社会に横たわる亀裂を浮上させたとの見解もあった。しかしながら，華やかなジャワ文化的表現の復活は，著者によればムハマディヤに対するクジャウェンの再挑戦ではなく，ムハマディヤ内で土着の文化を許容する新世代と保守的な旧世代との精神的な闘争である。労働者の権利主張も大きな問題にはならず聴衆に受け入れられた。ムハマディヤという狭義の共同体（ウンマ）より，より広い社会や共同体への貢献が意識されるようになり，コタグデへの「郷土愛」が強調されるようになった。このことは2006年の震災における活動でより明確になった。終章においては，これまでの議論を振り返ったうえで，ムハマディヤの将来は草の根における社会活動にかかっていると結論づけている。

Ⅲ　本書の意義と課題

以下，今日のインドネシアをフィールドとした地域研究およびイスラーム運動の研究の発展における，本書の意義と課題を検討したい。第1に，手堅い社会史の研究として，本書から学ぶところが多い。すなわち，植民地期から現代までの経済的政治的な資料を押さえたうえで，聞き取りを中心とした人類学的調査はもちろん，ムハマディヤの地方支部の会報や金曜礼拝の説教など多様な資料を活用して，ひとつの町におけるイスラーム運動の100年を丁寧に描き出している点である。私見では，インドネシアをフィールドにしたとくに日本の人類学や宗教研究には，ナショナル・レベルの歴史やフォーマルな政治における変化を看過しているものが少なくない。また歴史研究と現代社会・政治の研究の断絶も大きい。しかし本書によれば，コタグデのあるいはインドネシアにおけるムハマディヤの発展は，植民地期からの経済構造の変化を踏まえることが不可欠であり，また9月30日事件以降の共産党員粛清によって生まれた政治状況抜きには語ることはできない。後者は「ムハマディヤのイデオロギー」形成においても極めて重要であった。前述のように，ムハマディヤ会員によるPKIの否定が，ジャワの文化的概念を踏まえて語られるくだりはとりわけ興味深い。

第2に，本書はイスラーム運動研究において示唆するところが多い。倫理的な運動としての側面に加え，組織の変革と大衆的な支持基盤の維持におけるワクフや新たな社会活動の重要性を指摘している点である。政治学の立場からいえば，しばしば軽視されがちな（支持者とあるいは政治組織との間の）パトロン・クライエント関係のアクターとしての宗教組織の重要性，と言い換えることもできるだろう。もっとも本書には100周年を迎えたムハマディヤへの政策提言という側面もあり，マイクロファイナンスやジャワ島中部地震における復興支援などの活動の影響について，詳細な記述と分析を展開しているわけではない。今後の研究において着目すべきテーマとして受け止めるべきだろう。

本書への疑問点と残された課題についてもいくつか指摘しておきたい。まずクジャウェンの位置づけである。著者によれば，少なくとも20世紀前半以降のコタグデにおいて，ムハマディヤが着実に影響力を増し，イスラーム（サントリ）の価値観がクジャウェン（アバンガン）を凌駕した。そして今日の民俗芸能の興隆はイスラームに挑戦するものではなく，つまりはジャワの混淆的な信仰や世界観から切り離されたものであるという。たしかにジャワの100年において，イスラームの影響力は確実に大きくなっている。そしてムハマディヤがジャワ文化の外部にあるのではなく，そのなかからイスラーム的要素を引き出したことによってこうした状況が生まれた，という主張は非常に魅力的である。しかし，

ムハマディヤに加わらなかった人々において，どこまで同様の論理が通用するのかは，十分検証されているとはいえない。それはおそらく本書の方法論の問題であろう。調査対象となった人々のほとんどはムハマディヤの活動家であり，本書はムハマディヤの内在的理解には成功している（そしてこれは極めて重要な成果である）が，その外部者の視点がしばしば欠落している。

同様の問題はPKI党員の粛清についての記述からも窺える。コタグデは，1955年総選挙ではイスラーム系のマシュミ党と並んで，PKIに約4割もの支持が集まった地域であった。それでも1965年の党員の身柄拘束は平和的で，流血事件もなかったという。それは同地の多くの共産党員がムハマディヤのメンバーと家族や友人関係にあり，また東ジャワで起こったような深刻な階級闘争がなかったからだという（p.240）。しかし，仮にPKI党員の「逮捕」時に衝突がなかったにしろ，その後刑務所に収容され，あるいは流刑に遭った人々の社会復帰が容易だったとは到底考えられない。著者自身が指摘するように，現在でも政治犯のリストが村レベルで維持されている。1965年の衝撃は消え去っていないのである。著者の1970年代の臨地調査においてこのことを探求するのは不可能に近かっただろうが，民主化以降であれば，もう少し現実に迫ることができたのではなかろうか。

パイオニアというべき本書のオリジナル版の後に次々と出版された1980年代以降のジャワのイスラームを扱った人類学の成果への言及が皆無であることも指摘しておかなければならない。ヘフナー，ウッドワード，ビーティーらの著作を踏まえて，本書の第Ⅱ部を位置づけるべきではなかっただろうか。著者長年の集大成ともいうべき本書において，これら後続の研究に対する著者の見解を読みたかったのは評者ばかりではなかったはずである(注1)。他方，コタグデを舞台とした近年の研究は現地の卒業論文まで視野に入っている。また第II部にはオリジナル版や当時の著者の論文に対する，ムハマディヤの活動家や現地の研究者からの批判がたびたび引用されており，彼らとの対話を重ねながら，著者の研究が積み上げられてきたことがわかる。このような臨地研究における態度や関係構築の仕方こそ，評者のような後学の地域研究者にとってなにより範とすべきところであろう。

（注1）ジャワのイスラーム化をめぐる議論については本書と同時期に出版されたRicklefs［2012］も参照されたい。

文献リスト

Beatty, Andrew 1999. *Varieties of Javanese Religion: An Anthropological Account*. Cambridge and New York: Cambridge University Press.

Hefner, Robert 1987. “Islamizing Java? Religion and Politics in Rural East Java.” *The Journal of Asian Studies* 46(3): 533-554.

——— 2011. “Where Have All the Abangan Gone? Religionization and the Decline of Non-standard Islam in Contemporary Indonesia.” in *The Politics of Religion in Indonesia: Syncretism, Orthodoxy, and Religious Contention in Java and Bali*. ed. Michael Picard and Rémy Madinier. London and New York: Routledge.

Ricklefs, M.C. 2012. *Islamisation and Its Opponents in Java: c. 1930 to the Present*. Singapore: NUS Press.

Woodward, M.R. 1989. *Islam in Java: Normative Piety and Mysticism in the Sultanate of Yogyakarta*. Tucson: University of Arizona Press.

（岩手県立大学総合政策学部准教授）